

巻頭言

岩 本 武 和

『経済論叢』は、1915（大正4）年7月に創刊され、今年で100周年を迎えることになりました。その歴史は、経済学部や経済学会の設立（1919年）よりも古く、本学部がまだ法科大学時代のことでした。理論研究と政策提言とにバランスが保たれた『経済論叢』は、創世期の日本の経済学研究において先駆的な位置を占めると同時に、一大学の紀要としての役割をはるかに超えて、社会的に大きな影響を与えました。

さらに、1926年には欧文紀要 *Kyoto Economic Review* (KER) が創刊されました。このKERは本邦最初の欧文紀要であり、日本の経済学研究を海外に発信する上で、重要な役割を果たしてきました。

本経済学会では、「経済論叢創刊100周年記念号刊行委員会」（委員長は藤井秀樹教授、事務局は北田雅講師）を立ち上げ、この100年間に執筆された数多の論文のうち、後世に伝えるべき重要な作品を精選し、解題を付して編集・再掲するという企画を2年間かけて続けてまいりました（詳細は編集後記をご参照下さい）。その結果、河上肇、本庄栄治郎、高田保馬、柴田敬、田杉競、森嶋通夫、岸本英太郎、島恭彦、堀江英一、岡部利良、菱山泉、平田清明、伊東光晴、浅沼萬里、という錚々たる顔ぶれによる第一級の論文集として刊行される運びとなりました。本誌は、日本における欧米経済学・経営学の受容の歴史の刻んだ貴重な資料としてだけでなく、経済学における「京都学派」（Takashi Negishi, “Kyoto School of Modern Economic Theory”, *Kyoto Economic Review*, 73-1, 2004）のオリジナリティに溢れた研究を記録したのものとして、長く後世に語り継がれるべき作品集となったと確信しております。

私たちもまた、これを機に、先達の生み出された輝かしい業績を誇りとすると同時に、その伝統に新しい革新を付け加え、弛まぬ努力を続けていかなければならないと思います。経済のグローバル化に伴う危機と格差に対し、現在の経済学は未だ有効な解答を見いだせておりません。本誌に所収された古典を注意深く再読することによって、必ずやこれらの課題に答えるヒントを発見できるはずです。

最後になりましたが、八木紀一郎名誉教授（摂南大学経済学部長）には、本誌100年の貢献を踏まえられ、今後の展望を示唆された論稿をご寄稿いただいたこと、『戦時下の経済学者』（中央公論社、2010年）で第32回石橋湛山賞受賞された牧野邦昭氏（摂南大学経済学部准教授）には、本委員会の外部委員を務めていただき、本誌の歴史的役割についての論稿をご寄稿下さったことに対して、深く謝意を表したいと思います。京都大学学術出版会の淵上皓一朗氏にも、毎回の委員会に出席いただき、適切なアドバイスをいただいたことに、厚く御礼申し上げます。

（京都大学経済学研究科長）